

## 「読み手」の側に立って、授業展開を工夫する

新しい指導を考える会

### 1 『少年の日の思い出』学習材としての諸々

■『少年の日の思い出』の授業、その難しさは

ヘッセの『少年の日の思い出』は、長く中学校一年生の文学教材として位置づけられている。教科書教材として歴史のある作品だが、授業者としては、指導の難しさを多く感じるのも事実である。

まず、描かれている背景が、ドイツという気候も歴史も異なる国であること。例えばドイツは日の暮れが遅く、夕方の散歩（日没という冒頭部も、末の子がおやすみを言ったという表現など、時刻の感覚が日本のそれとは明らかに異なる。冒頭部の絵画的描写の理解にかかわるであろう当時のドイツの窓の大きさもイメージしづらい。ランプ・マッチなどという小道具たちも、現在の中学生の生活からは実に遠い存在である。

また、「客」の少年時代にあつての心の葛藤は理解しても、大人になってから自分の過去を振り返る「思い」をイメージすることの難しさもある。

わかってしまい、現在の「わたし」と「客」の場面に戻っては来ない。冒頭部の客の語りや情景描写の中に、この「思い出」が大人になった主人公にとってどんなものなのかが、表現されていると読み取ることができよう。

### 2 「冒頭部」を授業するにあたって

自分自身の実践を振り返ると、後半部分の少年の心の葛藤をとらえるところから主題に向かう授業が多かったように思う。今回は冒頭部、「客」が思い出を語り出す場面の扱いを考えてみた。それは、題名が『少年の日』ではなく『少年の日の思い出』である意味、ヘッセ自身による『クジャクヤママユ』からの改稿の意図をなぞることでもあろう。中学一年生という生徒の発達段階を考えると、読み方・味わい方の一つの方法がわかり、次の時間・他の作品・自分の読書へとつなげていける学習であることを意識したい。

■まっすぐ読めない子、読みに入れない子、言葉と向き合う時間が持てない子、読むにどうとらえるか

『国語教育相談室No50』の三名の実践提案にあるとおり、「学習者の視点に立つ」ことの重要性は言うまでもない。目の前の子どもの実態を把握し、国語教室の中で学ばせてきたもの、そして「本教材で」何を学ばせるのかを、授業者が明確にしていかなければならない。同時に、次の同系列の学習材では何をいかに学ばせ、次の学年ではどうなのかという、学習者にとっては当然の「こうなっていたい」という具体的な姿をはっきりと示さなければならず、これらは決してたやすいことではない。

■それでも中学生に向かい合わせたい

前述の難しさが存在しているとしても、この文学作品は少年の心理描写や情景描写が美しく豊かであり、中学生がじっくりと読み、向かい合うにふさわしいものといえるだろう。

ちやうどの収集に熱中する主人公の様子、熱情から盗みに至る必然性を帯びた表現の見事さ、非の打ち所のない隣の少年の存在や優しくも毅然とした母親との葛藤場面、自分の犯した罪との対峙、そして自らちやうどをつぶすという熱情の対象との過激な訣別のエンディングなど、思春期真っただ中の彼らが共感をもって読み深めることができる作品であると考えられる。

「混迷」極まりない現在の日本社会を中学生として生き、他と関わりながら自律へと向かう彼らである。主人公の心の痛みを読み取り、体験を共有する過程で心を揺さぶられ、人間を理解する教材としたい。

■作品の構成は

この作品の構成は、大きく前後二つの部分から成り立っている。

一つは、「わたし」のもとを訪れた「客」が、ちやうどの収集の話になり、書齋で少年の日のちやうどにまつわる暗い思い出を語り出す部分。

二つは、それ以降に描かれる部分で、「客」が十歳ごろの熱情的なちやうど集めの様子を語る部分。そして十二歳ごろの事件の展開であり、誘惑に負けて隣の少年エーミールのクジャクヤママユを盗み出し、つぶしてしまつた事件の顛末である。

過去が現在にはさまれているような、いわゆる「額縁構造」でありながら、終末がちやうどをつぶす少年時代の描写場面で終

かつて校内暴力が全国的に吹き荒れ、授業の成立が危ぶまれていた時代に教壇に立つた経験がある。その時、目の前にあつたのは、画一的な授業の連続、教師主導の指導から確かに「落ちこぼされた」子どもたちの「荒れ」であつた気がする。現代の子どもたちに表れている現象は異なり、さらに多様化しているが、根っこは同じだと感じている。彼らの「痛み」を教師が感じることなくして、何が始まるかというのか。手を打つことをしない教師や授業に、従順についてくる子どもばかりを期待することはできない。

■教師に欠くことのできないものとは

本居宣長は、『源氏物語 玉の小櫛』で、歌における「あはれ」の用例をあげながら、「見る物聞く事なすわざにふれて情(ココロ)の深く感ずる事」を「あはれ」と言うのだと述べている。続いて、「それを聞ける人の、げにと感ずれば、いよいよさはやぐわざなり」「読んだ人がそのとおりだと思つてくれればますます心が晴れるのだ」と述べる。こうした「ものあはれ」を解する人間だけが、人の悲しみに共感し同情することができる。「ものあはれ」を知ることが人が人とともに生きるための基礎でもあると説いている。宣長は「あはれは、悲哀にはかぎらず、うれしきにも、おもしろきにも、たのしきにも、をかしきにも、すべてあはれと思はる、は、みなあはれ也」と述べる。「ものあはれ」を知るといふ立場は、学校現場での教師の欠くことのできない素養であり、文学教材を読む要素でもある。また「読んだ人がそのとおり(あはれ)だと思つてくれればますます心が晴れるのだ」とは、『少年の日の思い出』にあつて、「客」が語り出す理由の一つであると捉えることもできよう。

■わくわくするかな？冒頭部 わくわくさせたい！冒頭部

(1) 見事な風景描写・情景描写

子どもたちにとってはやや難解であるが、夕方の窓の外の描写からやみに沈む景色、不透明な青い夜の色といった、随所に置かれた力のある表現の前で立ち止まらせた。またそれが、「思い出」の何たるかを象徴する風景であり、これから語られるストーリーの暗示、伏線でもある。時間の経過を追いながら読むうちに、「夜」「やみ」に象徴される心の暗部、悪の誘惑を描いたものであると見ることもできよう。音読や視写を取り入れながら表現に注目をさせ、作者の意図を発見させたい。

一方、「ちょう」の描写に注目すると、「きらびやかに光り輝くものであり、ちょうという存在が「客」にとって少年時代の宝石のような価値を見いだされていることも理解できよう。

(2) 「思い出」の意味——「客」の人物描写にあるヒント

「客」にとつての「思い出」の意味は、彼の語る言葉、行動やしぐさといった人物描写の中に発見できよう。「妙なものだ。」から始まる告白へのいざない。箱のふたを閉じて、不愉快でもあるかのように口早に言う「もう結構。」の一言。「……自分でその思い出をけがしてしまった。話すのも恥ずかしいことだが、……。」という言葉。外のやみから見分けがつかない窓の縁に腰かける「わたし」。

小グループで「わたし」「客」「地」を分担しながら朗読劇を行うことで、子どもたちに「客」に同化させながら考えさせたい。「客」は、ちよう集めに熱中する「わたし」になら、自分の少年時代の熱情や、そうならざるを得なかった状況(必然)を理解してもらえそうだと考えたにちがいない。苦くも懐かしい思い出を「客」に話させるための仕掛けが、この冒頭部に置かれているのである。

3 授業展開の工夫と活動

1 題名から受けるイメージ

題名『少年の日の思い出』から思い浮かぶことや、題名から受けるイメージを自由に出させ、想像させることで先への期待感を高める。

2 「客」が思い出を語り出す場面のみ印刷したものを配布する

「これから語られるストーリー（『思い出』）は、主人公（彼＝「客」）にとつてどんな意味をもっているのか、冒頭部分から想像してみよう。」と、学習課題を提示する。加えて、情景描写から読み取れることとその効果を説明する。

- ① 情景描写は、登場人物の心理を映し出している。
- ② 情景描写は、ストーリーの展開を暗示している。
- ③ 情景描写は、書き手の意図と主題とつながっている。

3 情景描写に注目する

(1) 範読しながら、情景描写部分に傍線を引かせ（場合によっては、すでに太字にしておく）、続いて一斉音読させる。

(2) A Bのどちらかの作業を選択させる。

A 三人グループで起立して音読。五回音読できたら座る。  
※はつきりとすらすら読めるように協力させる。ワークシートの答えを相談して記入。  
※予想した答えの理由もはつきりさせる。

『少年の日の思い出』ワークシート

組 氏名

これから語られるストーリー（『思い出』）は、主人公（彼＝「客」）にとつて、どんな意味をもっているのか、冒頭部分から想像してみよう。

一、情景描写

- ① 場所 ↓わたしの
- ② 描写された時間 ↓
- ③ 思い出のイメージ ↓
- ④ ちょうのイメージ ↓

③④をそう考えた理由

二、主人公にとつての「思い出」の意味

① 課題にかかわる「客」の言葉・行動

② 「客」にとつての「思い出」の意味を書きなご。

B 三人グループで、描写部分の一部(①昼間の明るさは、②窓の外には、③すると、たちまち外の景色はやみに沈んでしまい、④わたしのちょうは、⑤彼が開いた窓の縁に腰かけると、⑥外では、かえるが、のうち、いくつかを抜いたシート)を視写。全員が終わったら札を上げる。ワークシートの答えを相談して記入。

(3) 発表、交流させる。

4 「わたし」「客」「地」を分担しながら朗読劇を行う。

(1) 学習課題を確認し、練習に入る。

※練習をしながら、課題にかかわりそうな「客」の言葉、行動に傍線を引かせ、画用紙に書き出す。何度も音読をすること、役割を変えながら演じて、課題に迫ることを支援。

(2) いくつかのグループに発表させる。

※演じるときの小道具(軽い厚紙の箱・ランプ)に見立てた何か)は教師が用意する。

(3) 書き出した言葉を掲示し、課題について予想したことを交流する。シートの完成提出↓評価材とする。